

有機企画

挿絵 / 火愚夜

二次元ドリームノベルズ

天煌聖姫
ヴァーミリオン

フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン

試し読み版

18
未 満

◆天煌聖姫◆ ヴァーミリオン

フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン

小説 有機企画

挿絵 火愚夜





登場人物紹介

Characters



天煌聖姫ヴァーミリオン

かみしろあい か
神城愛華

天王寺学園に通う心優しき少女。母親の冴子に託されて天煌聖姫ヴァーミリオンとなり、デモンコアと戦う。



かみしろさえ こ
神城冴子

愛華の母親。デモンコアとの戦いから一線を退いていたが、ダルルゴアとの戦いのために復帰する。



天煌聖姫セルシアン



エリス

Sクラスのデモンコア。《色欲の夜天》の二つ名を持ち、人間に従順なペットにするのが生きがい。

第一話	参上！ 天煌聖姫ヴァーミリオン！ 正義の勝利と悪魔■女の罠！	006
第二話	囚われた紅髪ヒロイン！ 触手チンポで屈辱アクメ！	016
第三話	屈辱のフタナリ変身！ スライムに鬩られる美少女の秘口！	034
第四話	羞恥の落書きプレイ！ 淫語で汚されていく天煌聖姫の裸体！	049
第五話	参上！ 天煌聖姫セルシアン！ Hカップハイズリ&恥垢を舐めとられる人妻ヒロイン！	063
第六話	淫辱のオナホクイズ！ 感触をレビューさせられる蒼髪ヒロイン！	081
第七話	汚辱の着衣お漏らし！ 息子のそばで辱められる熟れた肢体！	098
第八話	淫辱に侵される学園生活！ 触手制服で羞恥オナニー！	118
第九話	恥辱のちんぽチャンバラ！ オークの群れに輪姦される正義のヒロイン！	138
第十話	最悪の痒み責め！ 幼女にチンポを挿ってもらう美熟女ヒロイン！	160
第十一話	屈服のコスプレ撮影会！ 強制ハイグレ&メイド姿で尿道イジメ！	183
第十二話	這いよる魔手、下着女装で赤面足コキ！ 園児幼女に犯される少年の尻穴！	214
第十三話	外人墓地の決闘、そして新たなる調教の幕開け	234
第十四話	学園でプタ鼻綱渡り！ 鼻フック羞恥制服で歩く母娘ヒロイン！	243
閑話	恥辱のザーメンクッキング	265
閑話	ゴブリン輪姦と夫の写真にぶっかけ	292
限定書き下ろし番外篇	激悦のチンポ綱引き！ フタナリを競い合う母娘ヒロイン！	318

第一話 参上！ 天煌聖姫ヴァーミリオン！

正義の勝利と悪魔の女の罠！

太陽が沈み、空にインクをぶちまけたように暗い夜。高層ビルの窓に灯る光がオフィス街をぼんやりと照らしていた。地上では様々な人々が家路を急いでいる。どうということはない街の一風景。

しかし、異常は確実に起こっていた。ビルの屋上をすつぽりと覆うように、ドーム状の建造物が出現したのだ。

紫色でクリアな六角形が集まってアーチを描き、まるでSF映画に登場するバリアのようである。明らかに普通ではないが、隣の建物や地上から騒ぎ立てる人間は一人もいない。

建造物はこの次元の物ではないからだ。

「はあっ……はあっ……」

屋上へ繋がる扉を開き、学生服の少女がドームの中へ現れた。小柄でスタイルもよく、可愛いという形容詞がよく似合う。

水を含んだ桜色の唇からは熱のこもった息が吐き出される。階段でここまで昇ってきたのか息が苦しそうだ。栗色のロングヘアがふわりと揺れ、ブレザー制服に玉のような汗が落ちる。

少女は息を整えると、

「わたしはここにいます！ 今すぐその人たちを解放しなさい、ダルルゴア！」

決意を込めた眼差しで対面した相手を——いや、侵略者を正面からしつかりと見据えた。

「ゴハハハハ！ よく来たなヴァーミリオン、今日が貴様の最期だ！」

大口を開け返事をしたのは、体長八メートルもあるブタの怪物。巨大な体躯にスパイクのついた鎧を装備

し、手には大斧とモーニングスターが握られている。ドーム型空間隔離領域、エデンフィールドを展開した張本人だ。

ダルルゴアと呼ばれたそれは魔界からの侵略者、デモンコアの一体であった。デモンコアとはおとぎ話に登場する、悪魔やモンスターの正体だ。彼らは闇に潜み血肉を喰らうために、時として人間の次元へ現れるのである。

足元には気絶した会社員たちがロープで一括りにされ、囚われていた。

「安心しろ、手など出さん。こいつらは誘い出すためのエサにすぎんからな。さあさあさあ！ 我と全力で戦え！ 変身しろ！」

「言われなくても！ セイクリッドギア、セットアツプ！」

スマートフォンめいた小型のデバイスを取り出し叫ぶ。

次の瞬間、デバイスの中心にある金色の宝石が輝き、目の眩むような閃光が放たれた。

身に着けていたブレザー制服が光に溶けて消え、一糸纏わぬ生まれのままの姿に戻る。露わになった白い肌をオーロラのベールが包み少女の身体を戦士へと変えていった。

髪の色が燃えるような深紅に変わり、衣装に変化したベールが可憐に肢体を包む。しなやかな身体にはぴっちりとした肌につきく白色のレオタードスーツ。股間にはひらひらとした緋色のマイクロミニスカート。たおやかな手足には白銀のメカニカルなガントレットとブーツ。ロングの紅髪には太陽をモチーフにした髪飾り。最後に張りのある胸部に金色の宝石が装着され、目の眩むような輝きを放つ。

同時に少女は変身を完了した。

「光は光に！ 闇は闇に！ 悪いデモンコアは星屑に！ 魔を討つは正義の拳！ 天煌聖姫ヴァーミリオン！」

ンここに参上！」

凜とした口調で名乗りを決める。

彼女こそが父の開發したセイクリッドギアの適合者であり、大気に満ちる神聖粒子しんせいじゅうしを集約して超人的な身体能力を得た人物。人知れずデモンコアと戦う、天煌聖姫ヴァーミリオンなのだ。

ヴァーミリオンは両の拳を握りしめ、敢然と敵へ突進する。細い脚からは想像もできないトルクが生み出され、瞬く間に距離が縮まっていく。

「そうだこい！ こい！ こい！ こい！ こい！ ゴハオオオオオツツ！ ハアツ！」

疾駆を見たダルルゴアは巨大な魔法陣を展開、紅髪ヒロインを迎撃する。六芒星から出現するのは棍棒を携えたオークの集団だ。豚鼻をひくつかせ緑色の肌からは悪臭が漂う。メスならば同族以外にも襲いかかる危険な種族である。

一体一体が大人の三倍の筋力をもつ怪物で、踏みし

めたコンクリートにヒビが入るほどだ。

ヴァーミリオンは速度を落とさない。アクセル全開で突っ込み、オークの群れを薙ぎ払う。

ガッ！ ガッ！ ガガッ！ ガッ！ ドカッ！ ゴシヤツ！

「シャインパンチッ！ シャインキックッ！」

「グギヤアアア！」「ギヤウウウウ！」「グハアアア！」
「ブギイイイ！」

少女が拳や蹴りを放つたびにオークの身体に穴が開き、光と共に塵へ還かえっていく。天煌聖姫の圧倒的なパワーに魔界の怪物でも歯が立たない。一分とかならずに群れが駆逐される。

しかし、デモンコアの強さにもランクがあり、当然序列が存在する。オークの戦闘力はレートBだが、指揮するダルルゴアは現在六体しか確認されていないレートSの強敵だ。しかも少女の母にして先輩である天煌聖姫セルシアンは、サラマンダーの自爆トラップに

巻き込まれ消息不明。ヴァーミリオンはこの戦いを自分の力だけで乗り切らなければならない。

不安を抑え余力を十分に残しつつ、正義のヒロインは強敵に挑む。

「これ以上は無駄な犠牲が出るだけです。恐れていないのなら直接かかってきなさい！」

「ゴハハ！ いいだろう、《暴食の凶獣》ぼうじよくきようじゅう ダルルゴアいくぞ！」

怪物の得物と少女の拳が打ち合わされ大気が振動する。凄まじい轟音が鳴り響くが、エデンフィールドのおかげで地上の人々が気付くことはない。

火花を散らせながら両者は屋上を駆けていく。八十三センチDカップ美乳をブルンと弾ませながら、鋭い拳撃が巨体に突き刺さる。レオタードスーツから桃尻が見えるたびに、華麗なキックが弧を描いて直撃する。幾多の攻防があり、先にチャンスを狙んだのはヴァーミリオンだ。シャインパンチが武器を砕き、鎧を正面

から完全粉碎する。何度も強敵を打ち破ってきた実力はずいにレートSを上回ったのだ。みぞおちを殴られたダルルゴアは、苦しそうに呻きながらコンクリートの床へ倒れこんだ。

「ゴ……ゴハァッ！ ゲゲ……おのれ……おのれえッ！」

「勝負あります。二度と人を襲わないと誓ってください。そうすれば命まではとりません」

「グウウ……ウウ……我が……我が……我が敗れることなどあつてなるものか！ かくなる上は！」

「!! ダルルゴアなにを!!」

一目散に人質へ向かうダルルゴア。どんなに威厳のある態度をとっても所詮デモンコア。勝つためなら手段を選ばない。

「その人たちに手は出さないと云ったはず！ 卑怯です！」

「ゴハハハ……知ったことか！ 結果こそがすべて

よ！ 勝てばいいのだ、勝てば！」

乱暴に人質を掴み笑みを浮かべる。が、しかし、その表情はすぐさま対極のモノへと変化した。なんと人質が水になり溶けてしまったのである。

「なっ!! ば……バカな！ 何が起こった!!」

驚愕するダルルゴアに背後から迫る影。

蒼髪をたなびかせロングスピアーを肩に乗せながら、もう一人の天煌聖姫が登場した。

「予想通りの行動、まったく見下げはてた下種ね。もうしゃべらなくていいから潔く死になさい」

「きつ……貴様はセルシアン！ あの爆炎で生きていたのかッ！」

「ママッ！ よかった……無事だったんだ……」

「ヴァーミリオンその呼び方はやめなさい。ダルルゴア、お仲間ごと爆発させるなんて方法じゃ私は殺せないわよ。娘に心配かけたお礼、たっぷりさせてもらうわね」

「ぐう……ぐううう……!!」

鋭い視線を投げかける天煌聖姫セルシアン。コスチュームはヴァーミリオンと同じだが、彼女のレオタードスーツは黒。スカートや装備も蒼を基調として揃えられていた。

艶やかな前髪をまつすぐ切り揃え、後ろ髪は腰まで伸ばしている。月をモチーフにした髪飾りが夜闇に淡く光る。引き締まった肉体はモデルのようで、子供を産んでいるとは思えない。さらに胸の存在感が抜群で、スーツに押さえつけられた九十八センチHカップ巨乳が少し苦しそうである。

セルシアンはロングスピアーを一回転させると力を行使した。

「ハアアアアアッ——、アクアバインドッ！」

槍を中心に水流が巻き起こると鎖の形になり、ダルルゴアの体を締め上げ拘束する。神聖粒子を水に変換し操る彼女は変幻自在のスキルを使えるのだ。人質



いた。一人での戦いはまだまだ不安が大きく、内心ブルブルだったのだ。

「ありがとう、ママのおかげだよ！ わたし……わたし一人じゃ……」

「なに言ってるの。レートS相手に見事な戦いだっただわ。さあ、帰りましょう」

「うんっ！」

エデンフィールドを解除し家へと帰る天煌聖姫。

しかし、二人は気付いていなかった。

雲の狭間で一部始終をうかがっていた者がいることを。

「ふーん……あれが天煌聖姫……親子なんだ。キャハ、キャハハハハ！ いっくっばい楽しめそう♪」

闇の中で少女の形をしたデモンコアが、三日月のよう口を歪めて笑った。



「うわーん、遅刻ですっ！」

ヴァーミリオンこと神城愛華かみしろあいかはいきなりピンチに陥っていた。昨晚の疲れでぐっすり眠り、無意識の内に目覚まし時計を止めてしまったのだ。

急いで制服に着替え身だしなみを整えると、階段を降りダイニングルームに転がり込む。テーブルにはパンや目玉焼き、サラダの入った食器が並べられていた椅子に座ると急いで口に運び、手品のごとお腹にしまっていく。

その様子を見て愛華の母、セルシアンこと神城冴子さえこが苦言を呈した。髪の色は蒼ではなく艶やかな黒に戻っている。

「もう、眠りすぎよ。疲れているのはわかるけど、学校へ行くのも立派な使命なんだから」

「ごめんママ。ベッドが気持ちよすぎて」

「物のせいにしちやダメだよ姉ちゃん。だらしないな」

姉ちゃんと呼ぶのは弟の陽一やういちだ。まだ時間に余裕が

あるのか、のんびりと食パンを食べている。大人しい印象を受けるが、彼もまたデモンコアとの戦いに関わっている。

適性値の関係で変身はできないが、冴子と共同でアイテムを開発しバックアップを担当している。愛華に悩みを相談されることもあり、一家になくってはならない存在だ。

「わかっているよー、陽一。あ、もういくね！　いつてきます！」

「いつてらっしゃい」

「遅れるなよー」

何気ない会話を愛おしく感じながら、愛華は玄関のドアを開けた。この生活を守るために変身して戦ってきたのだ。たとえどんなに敵が強大でも。

神城家は四人家族で父親は海外でデモンコアの研究をしている。愛華がヴァーミリオンに変身したのも父の書斎でセイクリッドギアを発見したからだ。すでに

天煌聖姫として人類を守っていた冴子は反対したが、学園の友達や街のみんなを助けるために、彼女は変身することを選んだ。

「がんばれ、わたしっ！」

自転車に乗って春から通いはじめたばかりの、天王寺学園への道を走る。河川敷を通り商店街を進んでいく。身体を鍛えている愛華はかなりのペースでペダルをこいでいった。

このペースなら始業のベルに間に合いそうだ。

と、廃工場の前を通りかかったところで栗髪少女はペダルから足を下ろした。中から女の子の声が聞こえたのだ。ショートカットするために裏道を選んだので、周りに人がいる気配はない。

門をくぐって様子を見ると、

「いやああああ、助けてー！　パパー！　ママー！」

声は悲鳴へと変わった。

緊急事態が起きていることはわかる。遅刻を気にし

ている場合ではないと、愛華は工場の扉に手をかける。幸いカギはかかっていなかったので、すぐに中へ入ることができた。

そこにあつたのは打ち捨てられてホコリを被った機材と、怪物を前にした女の子の姿だった。

怪物はウエアウルフのデモンコアで、ナイフのような爪を立て、今にも幼い身体を引き裂きそうだな。

もはや一刻の猶予もない。セイクリッドギアを取り出し変身する。

「セイクリッドギア、セットアップ！」

瞬きの内に愛華はヴァーミリオンへと変わった。灼熱を想起させる紅髪を風になびかせ、ガントレットをウエアウルフの顔面に叩き込む。

「シャインパンチ！」

「グギャアアアア！ アアアアアア！」

頭部を爆散させ塵になるウエアウルフ。レートCの下位デモンコアだったようで簡単に勝負は決着する。

女の子に駆け寄り怪我はないかとヴァーミリオンは心配した。

「だいじょうぶ？ どこも痛くない？」

「ヒック、エッグツ……う……うん、平気だよお姉ちゃん。あの……助けてくれてありがとう。こ……怖かったよお」

「よかった……無事ですすね」

ホッと胸を撫で下ろし、勝利の余韻に天煌聖姫が警戒心を緩めた。早朝から がこんな場所にいる不可解さに気が回らない。

そして、その一瞬が命取りになった。

「なーんてね☆ 油断しちゃったかな？ ヴァーミリオンのお姉ちゃん」

「えっ!? あなたは——」

急速に高まる魔力反応を警戒したがもう遅い。女の子の牙が首筋に食い込み、そこで意識は途切れた。

と、その時デビルミラーが目の眩むような閃光を放った。紅髪ヒロインはカメラのフラッシュユメいた光を浴び、とっさに目蓋を閉じる。

魔力の高まりを感じ少女の第六感が嫌な予感を告げる。

恐る恐る目を開くと、そこには想定外の恥辱が待ち受けていた。

「——ッ!? なっ……なっ、なんですかこれはっ!？」

「キャハ☆ よくできていますでしょ、これがデビクんの便利スキルだよ☆」

ヴァーミリオンの眼前にあるのは、自分そっくりの人形であった。身長や瞳の色、肌の質感、紅髪の滑らかさなど、どれも本人に瓜二つの精巧さだ。

違う点といえばレオタードスーツを身に着けていないことである。若くみずみずしい肌が晒され、Dカップ美乳と張りのある尻を乗せた裸身が露わになって

いる。

さらに言えば、ガニ股で手を頭の後ろで組む羞恥ポーズをとらされていた。フタナリベニスも勃起状態のまま忠実に再現され、ピンッと天を仰いでかなり恥ずかしい格好だ。悪魔■女の嗜虐心がそのまま表れているようである。

自分の裸身をオモチャにされ変身ヒロインは声を荒らげる。

「悪趣味がすぎます！ こんなことをして何がおもしろいんですか！」

「あれ〜？ エリスにそんな口のきき方しているかな〜？ 自分の立場わかってないペットは殺処分だよ？」

「っ……ご、ごめんなさい……」

「わかればよろしい。それじゃクイズだよ、今からこのヴァーミリオン人形で何をするでしょう〜か？」
「さ、さあ……知りません……」

「も〜ノリが悪いなあ。正解は〜〜落書きブレイでした♥ お姉ちゃんには今から人形に落書きしてもらいま〜す♥ はい、これペンね♥」

「ら……落書き……？」

「書くことはエリスが指示するから間違えないようにね♥ 魔界のペンだから簡単に落ちないし書き直してきかないよ♥」

「……………？」

手渡された黒マジックを見つめ戸惑う。これの何がフタナリ調教と関係あるのかまったく見当もつかない。自分が落書きされるのならともかく、人形を汚すことに意味があるとは思えない。

困惑しつつ指示を待つ。

「それじゃ、人形の額に『バカ』って書いてもらおうかな♥ 大きくよく見える字でね♥」

「はい……ば、バ……カ……」

きゅっ♥ きゅっ♥ きゅううっ♥

自分そっくりの人形にバカと書いていく紅髪ヒロイン。直接肉竿を刺られるような苦しさはないが、自分で自分を貶めているようで心がチクリと痛む。

見た目■女に命令されているのも屈辱を倍増させる。そして、レートSのデモンコアはただ落書きさせるだけで満足するほどヌルい相手ではない。恥辱セリフを強制しさらに辱めを加える。

「バカって書いたけどお姉ちゃんは どうしてバカなのかな？ 自分のことなんだからわかるよね？」

「あ、えつ……えつと……それは……」

「もうわかるだろうけど、エリスが望む答えをちょうだい♥ 言えなかつたらお仕置きだよ♥」

「ううう……こ、この悪魔……っ！」

悪魔■女の思惑は痛いほどよくわかる。ここまでの調教で慈悲の心など微塵もないと理解していたが、今回も最悪のブレイを用意していたのだ。正義の心を徹底的に陵辱するために。

よくここまで下劣な発想ができるものだど驚くしかない。

少しの逡巡の後、ヴァーミリオンは口を開いた。灼熱のような屈辱に焼かれ、戦えるなら今すぐにでも戦いたい。

「す、すぐに騙されて捕まってしまうバカ変身ヒロインだからです♥ それにフタナリチンポ調教でアへ顔晒しちゃうバカ女だからです♥」

「大正解♥ よくわかっているじゃん、バカお姉ちゃん♥」

「は、はい……♥ わたしはフタナリ変態のバカペックトです♥ ……これまでエリスさまに偉そうな口をきいてすいませんでした♥」

「次はお口の横に矢印を引っ張ってえ、その上に『ザーメン大好き♥』って書いてもらおうかな♥ もちろん理由も忘れずに♥」

「ぎ、ザーメン……大……好き……♥ お口はザーメ

ンさま専用の……お、おトイレです♥ チンポ舐めるくらいしか取柄のない淫乱聖姫に、ど、どうかくっさいザーメンをお恵みください♥」

「キャハハハッ♥ キャハハハハッ♥ あゝあ、お腹いたい♥ よくそこまで下品なことが言えるね♥ エリスだったら、こんな変態ヒロインに守られたくないなゝゝ♥」

「ぐっ……くううう……い、言わないでください……」
「三つめはおっぱいだね♥ 乳首の周りに十センチくらいの円を書いて♥ あ、左右両方のおっぱいにね♥」
「んっ……きゅっ……こ、こうですか……?」

「書けたら乳首の上を通るように縦線を一本引いてね♥ それができたら円に十本くらい短い線を書き足してみて♥」

「んん……きゅ……きゅ……きゅっ……きゅッ……か、書けました……これでいいですか?」

「上手上手♥ このマークの意味お姉ちゃんはわか

る？」

「いえ……な……なんですかこれは……？」

「これはね〜〜『おまんこマーク』っていうんだよ♥ お姉ちゃんは女性器の記号を胸に書いてちゃったってわけ♥ うわつ、キモッ！ キモ〜〜イ♥ おまんこの落書きを胸にするなんて、アタマがおかしいのかな〜♥」

「や、そんな……わたしそんなつもりじゃ……やつ、い、いやあああああッツツ!!」

最悪の女性器落書きで悲鳴を上げる紅髪ヒロイン。自分そっくりの人形に膣穴変態マークを書かされ、カアアツと顔が赤くなる。

純情な美少女にとつて泣きたくなるくらいの屈辱だ。惨めで恥ずかしくて悔しくて、ペンを握る指が震えてしまう。

自らの手で辱めている分、より多くの恥辱を感じてしまうのだ。しかも最低なことに、マゾ牝としての本

能が刺激され、肉竿を半勃起させてしまった。

可憐に戦う天煌聖姫は淫靡なペニス欲求を見られま
いと、スカートの裾を下げる。

（くっ……くやしいつ！ セイクリッドギアさえ使えれば負けないのにつ！）

己の弱さにギョツと拳を握る。悪魔の陵辱者はその様子を嘲笑いながら、次なる落書きを命じた。今度のターゲットはすすべのお腹だ。

「四つ目はお腹に〜『変態ガバガバマンコ目指してます♥』と『ファック・ミー♥』ね♥ どんどん淫乱人形に染めちゃうよ♥」

「へ、変態……が、ガバガバマンコ目指して……ますす♥ ふあ、ファック、み……ミー♥ い……いつでもおチンポを受け入れます♥ 年中無休でザーメン募集中で〜す♥ わ、わたしのおまんこを無茶苦茶にしてほしいのツツ♥」

「太腿からお股に矢印引っ張って、『汚物ザーメン無

料配布中♥」も追加ね♥」

「お……汚物……ぞ、ザーメン……無料配布中です♥
い、いくらでもおチンポしこしこ、ぴゅっぴゅっしま
すので、毎日一番搾りのマゾ精液をもらってほしいで
すっ♥」

「へへへそんなんだ♥ 毎日ザーメン配っているんだ
ね♥ でもへへ、エリスは臭くて汚ったない童貞ザー
メンなんてタダでもいらないけどね♥」

「は、はうう……くううう……もういやあ……」

悔しがる紅髪ヒロインをどんどん追い詰めていく。
変態落書きプレイで膣肉からは愛液がこぼれだし、腋
やうなじからは牝の淫臭が放たれる。

倒錯的なシチュエーションに理性が溶解し、マゾヒ
ロインの媚肉は快楽を求め続けていた。フタナリペニ
スも人形と同じようにフル勃起状態だ。

そして、落書き調教はついにフタナリペニスと陰囊
まで達してしまった。

フタナリ男性器に屈辱的な文言を書かされてしまう。

「五つ目はデカキンタマに、んへ、何にしようかなへ
へ」

「ど……どうせ卑猥な言葉でしょ……」

「そうだ♥ お姉ちゃんは正義のヒロインだよね？
みんなを守るために戦っているんだよね？」

「あ、当たり前です！ 人々を苦しめるデモンコアを
倒すのが、わたしの使命、そして正義です！」

「だったら、忘れないように『正義』って書いとかな
いとね♥ これでずへへつと忘れないよ♥」

「ぐっ……あ、あなたっ！」

「ん？ どうしたの？」

「ッ……んくうう……せ、正……義♥ わ、わたしは
絶対悪には屈しませんっ♥ こ……この正義のキンタ
マに誓って戦い抜きますっ♥」

「エリスも変身ヒロインはいっぱい見てきたけど、
キンタマに正義って書いてある女の子は初めて見たよ

♥ ヴァーミリオンって信じられないド変態なんだね
♥ キモすぎ♥

「ああ……へ、変態で申し訳ないです♥ で、でもこれは平和を守るために必要なことなんです♥ 淫乱キンタマに書いて決意を忘れないようにしているのです♥」

「うわっ、ドン引きだよお姉ちゃん♥ キャハハハ♥ 最後は勃起チンポね♥ そこに『エロチンポ万年発情中♥』だよ♥ 淫乱マゾのお姉ちゃんにピッタリなチンポにしようね♥」

「え、エロ……ち、チンポ……万年……発情中です♥ わたしのチンポは……勃起してばかりのスケベチンポです♥ 射精することしか考えていない猿チンポです♥ 変態オナニーばかりして、ティッシュを無駄使いしているエロチンポです♥」

「すっごくいいバカみたいなフタナリチンポの完成だよ♥ よく似合ってる♥ オッケー、これで終了かな

♥ 恥ずかしい落書きだらけの変態ヴァーミリオン人形が完成したね♥ お疲れさま♥」

嬉しそうに落書き人形を見つめるツインテール■女。一方、ヴァーミリオンは安堵のため息をついた。もうこれ以上の屈辱はないだろう。

しかし、その瞬間デビルミラーが再度光った。まぶしい光が屋内を埋め尽くし、また目を閉じる紅髪美少女。

次に目蓋を開いた時には、すべてが変わっていた。人形の晒された裸身、羞恥ポーズ、変態落書きのすべてが本物のヴァーミリオンにそっくりそのまま転写したのである。

ガニ股開脚で、額には『バカ』、口元には『ザーメン大好き♥』、Dカップ双乳には『おまんこマーク』、お腹には『変態ガバガバマンコ目指してます♥』と『フアック・ミー♥』、太腿から股間には『汚物ザーメン無料配布中♥』、金玉には『正義』、勃起肉竿には『エ

ロチンポ万年発情中♥』のエロ落書きが書き込まれているのだ。

もはや変態以外の説明ができない紅髪ヒロインの痴態がデビルミラーの鏡面に映されてしまった。おまけに魔力で金縛りにされ、指一本動かすことができない。嫌でも正面に映された自分の痴態を見てしまう。

「ヒッ……き、きやあああああッッッ!! やっ、い……いやあああああ……!!」

「アハッ♥ キヤハハハハハハハハハッ♥ デビくんもう一つの便利スキルは、人形の状態を本人に移し替えることなんだよね♪ 自分で書いた落書きよく似合ってるよお姉ちゃん♥」

「な、なんで?! なんでえ?! こ、こんなの嫌ですっ! け、消してっ! 消してっ! 消させてくださいっ!」

「そんなにイヤかな〜? 変態ヒロイン専用コスチュームって感じでカワイイけど♥ 誰が見ても一目で痴女だってわかるしね♥ フタナリマゾにはびつたり

だよ♥」

「嫌に決まっています! わたしはフタナリマゾじゃありません! どこまで辱めれば気がすむんですか!」

「勃起しながら言っても説得力ないな〜♥ それにもう射精したくなっているでしょ〜?」

「え、あ……♥ ふ、ふああ……あぐっ……ち、おチンポ熱いい♥ ど、どうしてえ♥ は……はうううううっ♥」

「実はそのペンって催淫効果があるんだよね♥ 文字の意味通りに淫乱になっちゃうの♥」

「んくうううう〜♥ そ、そんなあ……あつく……いまさらあ♥ ズルイい……っ……はぐううっ……お、おチンポおっ♥ おチンポ射精したいいいっ♥」

「ダメダメ♥ エリスが射精していいって言うまで我慢だよ♥」

湧き上がる肉棒衝動に翻弄されてしまう。ペンの催淫魔力で頭が沸騰しそうだ。ギンギンに張り詰めたメス勃起からザーメンを出したくて仕方がない。

天煌聖姫は腰をガクガクと震わせながら、射精許可をおねだりしてしまう。

「あ……ぐうう♥ ひやう♥ ひやふううううう〜

〜ん♥ だ……ださせてええええええつつ♥ 射精

っ♥ 射精っ♥ 射精っ♥ 射精っ♥ 射精っ♥ お

チンポどっぴゅんしたいです♥」

「どうしようかな〜」

「お願いしますエリスさま♥ おチンポが熱くて苦

しいっ♥ んああ♥ きゅふうう〜♥ あんっ、キン

タマも熱くなってる♥ ンンッ♥ し……おチンポを

シコシコさせてくださいい〜♥」

「も〜、しようがないなあ変態お姉ちゃんは♥ いい

よ、射精させてあげる♥ でも今から言うことを守っ

てね♥」

言うどエリスはフタナリ触手をタコの足に似たイボ触手に変化させ、ヴァーミリオンの肉竿に巻き付けた。

「ひやう！ ひうううううん♥」

イボ突起のコリコリとした感触と粘液のひんやりとした感触に、短く呻き声上がる。粘液の媚薬効果がさらに感度を高めた。

射精欲求がまた大きくなり、正義のヒロインは苦悩する。

陵辱者は触手をゆつくりと前後させながら耳元で囁いた。

「今から十数えてあげるから、エリスがゼロって言ったら射精していいよ♥ それと、途中で言う言葉はぜ〜んぶ復唱してね♥ 間違えたら最初からやりなおしだよ〜？」

「は、はいっ、復唱しますっ！ なんでも！ なんでも！ 早く射精させてください！ も……もうおチンポがパンパンなんです♥」

「じゃ、カウントは始めるね 十〜九〜」

「はうううううう〜」❤️ ぶんっ❤️ くう❤️ き
ゆうううううう〜」❤️

肉竿をフタナリ触手でしごかれながらカウントされ、
快楽が股の間を貫いていく。

粘液と先走り汁が混ざり合い、卑猥なハーモニーを
奏でた。

ぬちゅ❤️ ぬちゅ❤️ こしゅ❤️ こしゅ❤️ にちゅ

ぬちゅ❤️

「え〜つとね『わたしは身体に落書きするのが大好き
な変態露出マゾです』はい復唱♪」

「わ、わたしはあ…身体に落書きするのが大好きな

❤️へ…変態露出マゾです❤�んっ❤️へうっ❤️
くううううう〜」❤️

「八〜七〜、『正義のヒロインとか偉そうなことを
言ってますいません。本当は平和よりもフタナリチン
ポが大好きな射精ジャンキーです』キャハッ、おちん

ちんビクビクしてるよ〜」❤️

「正義のヒロインとかあ❤�え、偉そうなことを言っ
てすいません❤�んふううう〜❤�はぐっ❤�ん…
は、本当は平和よりも…フタナリチンポが大好きな
射精ジャンキーですう❤�」

変態セリフを復唱するたびにヴァーミリオンの疼き
は大きくなっていった。顔から火が出るくらい恥ずか
しいのに淫語で興奮してしまう。

フタナリちんぽは歓喜の涎でベトベトになっていた。
「六〜五〜、『キンタマに正義って書いて興奮す
るバカ女です。チンポにも日替わりで変態ワード書い
ちやう負け犬聖姫です』あ〜あ、触手がもう我慢汁で

ベトベト〜❤�最悪〜❤�」

「くふううううううんっ❤�き、キンタマに正義
って書いてえ❤�こ…興奮するバカ女ですう❤�は、
恥ずかしい❤�恥ずかしい❤�恥ずかしい❤�ち…
チンポにも日替わりで変態ワード書いちやう負け犬聖

ていく。全身落書きの最低痴態を晒しながら天国へ上
っていく。

『エロチンポ万年発情中』と書かれた肉竿は凄まじ
い勢いで白濁液を吐き出した。

ビュルッ♥ ビュルッ♥ ブビュルルルウウウ
~~~~ッ♥ ボビュッ♥ ビュ♥ ビュ♥ ドッピュ  
ウウウウウウ~~~~ッ♥ ドプッ♥ ドプッ♥ ドプ  
ッ♥ ドプンッ♥ ビュウッ♥ プビュルルルウウ  
ウウウ~~~~ッ♥

「ふあっ♥ んんんん~~~~♥ んっ……んほお  
おおおおおお~~~~ッ♥ へ、変態ザーメン  
でちやううう~~~~ッ♥ であるである  
であるッ♥ イクイクイク~~~~ッ♥  
ヴァーミリオン正義キンタマと下品マゾチンポでジャ  
ステイスチンポアクメする~~~~ッ♥  
~~~~ッ♥ 身体に自分でスケベ落書きしてえ♥ カガ  
ミ見ながら恥さらしザーメンだします~~~~ッ♥

う~~~~ッ♥

「うわっ♥ バカみたいにザーメン出しちゃってる♥
臭くて汚いザーメンびゅーびゅー出しちゃってる♥
自分の恥ずかしい姿でイクのそんなに気持ちよかった
んだ♥ 変態♥ 変態♥ 変態♥ 変態♥ 変態お姉
ちゃん♥ 触手チンポでおチンポしごかれて、女の子
の前でブザマに射精するなんてさいて~~~~い♥」

「や、ひやう~~~~ッ♥ いやあ♥ 言
わないでえ♥ 変態でごめんなさい♥ ごめんなさい
♥ ごめんなさい♥ でもマゾ射精気持ちいいんです
♥ わたし最低の痴女プレイでチンポ射精しちゃうま
す♥ 人に見られたら人生終了のド変態プレイでザー
メン出しちゃいます~~~~ッ♥ あん♥ ま、
またイク♥ イク♥ イク♥ イク♥ イク~~~~ッ♥
♥ お、おほおおおオオ~~~~ッ♥
~~~~ッ♥」

自分を貶め白目をむきながら、魂が抜けるような変



バカ

大  
梅  
ま  
ん

♡

マジック

Hot  
早稲  
穂  
の  
母

変態  
が  
が  
が  
の  
母

心  
手  
一  
か  
い  
無  
染  
留  
母  
の

正義

態絶頂をしてしまう正義のヒロイン。

デビルミラーで恥辱落書きを鑑賞しながら果ててしまおう。

「キャハハハハッ！ アッハハハハッ！ チョー受けるよお姉ちゃん♥ ププ、エリスは帰るから掃除してね♥ それとこのことは誰にも言えないから、気が変わっても相談しようとか余計なことは考えないほうがいいよ♥ あとは、うん、淫語も覚えてもらおうかな♪」

「ひゃうう……い、淫語お……？」

「そうだよ、エッチな言葉をいっばいね。次に会う時にテストもするから♥ それじゃ、あと三十日ががんばってね♥」

「はい、は、はあ……はあ……んはあ……♥」

ようやくガニ股ポーズを解除され、床に手をつく。

顔を上げるともうエリスの姿は消えていた。

窓の外からは茜色の空が見える。

天煌聖姫ヴァーミリオンのフタナリ調教はようやく一日目を終える。

（あと一か月もこんなことを……？ い、いえ負けません！ 必ず勝利してみせます！ ママ、陽一、わたしががんばりますから！）

太陽の輝きを胸に宿し、決意を新たにす天煌聖姫ヴァーミリオン。

ロングの紅髪が炎のごとく揺れ動く。

果たしてこの先に待つのは最悪の淫辱かそれとも希望の勝利か。

## 第六話 淫辱のオナホクイズ！ 感触を レビューさせられる蒼髪ヒロイン！

「ハアハア……ッ……」

膝をつき肩で息をしながら、身体の状態把握に努めるセルシアン。なんとか反撃する手段がないかと思考を回転させる。だが、やはり淫紋の起動でセイクリッドギアを操れず戦うことができない。

エリスに立ち向かおうと思っても身体が動かないのだ。

（ダメね……この子の害になる行動はとれない。淫紋を除去しないと何もできない……ッ）

悔し気にうつむく姿を見て悪魔■女はゲームを提案した。ヴァーミリオンと同じように心を折って、自分のペットにしたいのだ。

深紅の瞳にサディスティックな光が灯る。

「ねえ、オバサン。エリスとゲームしてみない？ 二十五日の間フタナリ調教に耐えられたら解放してあげる♥ ただし、途中でギブアップして、『変態ペットにしてください』って言ったら負けね。前に調教されるなら説明しなくてもわかるかもだけど♥」

「ええ……でも二十五日とはずいぶん中途半端ね。そんなに短くてもいいの？ あとで自分の愚かさを悔やむことにならないといいけど。それに」

「それに？」

「何があっても家族には手を出さないでちょうだい。それさえ守ってくれるならゲームをしてあげてもいいわ」

「キャハッ☆ 自信满满だね〜。ま、こういうタイプのほうが堕としがいあるけど。いいよ、愛華ちゃんや陽くんには手を出さないであげる。これで契約成立だね♥」

「なにかするなら早くしなさい。私もヒマではないのよ」

「じゃあ、さっそくゲームスタートだね。これからやってもらうのは〜、オナホ当てクイズだよ！ イエ〜イ、ドンドンパフパフ〜♪」

二十五日の期限はヴァーミリオンの調教終了日に合わせた設定なのだが、今のセルシアンには知る由もない。愛娘がフタナリ調教を受けていることも。

そして、エリスが指をパチンツと鳴らすと床に魔法陣が展開し、中からテーブルとその上に乗せられた円筒形の性具、すなわちオナホールが現れた。

半透明のオナホールは全部で七つあり、表面にAからFのアルファベットが刻印された物が六つ。刻印のない無印の物が一つある。その中から無印の物を手にとり、エリスは説明をはじめた。

「目隠しをしてこの無印のオナホールと同じ物を当ててもらおうよ♥ AからFの内一つだけがコレと同じオ

ナホなの♥ でも時間制限、二十回シコシコするまでに答えてね。できないとゲームオーバーになっちゃうよ♥」

「……………性根の腐ったデモンコアらしい内容ね。まあいいけれど、ルールそれだけなの？ 簡単すぎて欠伸がでそうだわ」

「あっそうだ、途中で射精してもアウトだからね。負けたらキツツイ罰ゲームを受けてもらうからがんばって♥」

「いいわ。さっさとしなさい」  
「まずはカタチを覚えてもらおうね♥」

蒼髪ヒロインは直立の姿勢で手を腰の後ろへ回し、股間を突き出すポーズをとらされる。早くも硬さを取り戻し、怒張したフタナリ陰茎を無印のオナホールが包み込んだ。

温かな疑似蜜壺が亀頭の先から根元までを淫猥に抱擁し、抽送するエリスの手の動きが急速に射精衝動を





「本当に……？ その答えでいいのかな？ うんしよつと」

「ええっ！ んん……んくうううう……♡ それでいいわ！」

「オツケー♪ はい、正解は〜」

「んん……ッ♡ あふううううう……♡ んっ

♡ は……はやくしてえっ♡」

「×！ はい、第一問クリア〜♡ あと十四回シコシコしたら第二問いくね♡」

「はあああああああんッ♡ と、当然よ……っ……くっ♡ くふううううう……♡ んんんんん……♡」

正解してもフタナリペニスを嬲られることには変わらない。二十回は絶対に抽送されるのだ。正解を見つければ以前に、射精を耐えられるのだろうかと蒼髪ヒロインを不安が襲う。

だが、それでも決してあきらめない。セイクリッド

ギアを手にとった時から、どんな屈辱にも恥辱にも耐える覚悟をしてきたのだ。

娘に手ほどきをしてきた自分が早々にあきらめて、敗北するわけにはいかない。心を刃のように鋭く研ぎ澄まし、二つ目のオナホールに挑む。

「Dのオナホールよ。次はDでお願いするわ」

「ご注文ありがとうございます♡ D、いっくよ♡」

DのオナホールはAと違って入り口が広く、あつさりとフタナリ陰茎を迎え入れた。長さもかなりあつて、セルシアンスの巨根でも窮屈しない。

エリスは快悦を与えるために先ほどより速く手を動かした。

ローションと先走り汁が混ざり、卑猥な水音を立てる。

しゅこっ♡ ちゅこっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡  
ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡

「どうかなく？ Dのオナホールは気持ちいいかな  
〜？ キヤハハ♪」

「ひうつ……は、はぐうう〜❤️ あ……アアン  
ンツ❤️ クウウウツ❤️ んぐううう〜❤️ あ  
ああああ〜❤️」

「ほらほら、喘いでばかりいないで説明してよ。中  
の具合とかさ。エリスつまんな〜い❤️」

「ん、んんっ❤️ あふうっ❤️ な、中はヌルヌルして  
いてえ……気持ちよくてえ……❤️」

「他には、他には？」

「穴がまつすぐで……ひ、ヒダが深いのおおお  
〜❤️ んっ❤️ ング……ツ❤️ ハウウウ〜  
ツ❤️ く、クセになつちやう❤️ おほおおオオオ  
〜❤️」

「うわ〜、亀さんがプルプルしてるよ❤️ トロトロお  
汁垂らしてエッチすぎ❤️ ん〜、先っぽが特にイイの  
かな〜？」

「あつ、ひいひいひい〜❤️ そ、そうなのっ  
❤️ 皮かむり包茎亀頭がイイのおつ❤️ 引く時にチュ  
ツチュってバキュームされちやううううツツ❤️」

悪魔■女にオナホコキされ、さらに恥辱レビューま  
でさせられてしまう。Dのソフトな刺激と強烈なバキ  
ューム力に肉竿の耐久力が削られていく。

頬が紅潮し膝がガクガクと震える。各オナホールの  
タイプが違うため、まったく異なる快感が蒼髪ヒロ  
インのフタナリ衝動を責め立てる。

快楽の奔流が思考を支配し考えがまとまらない。

十回をすぎたところでようやく答えを決めることが  
できた。

「答えは……×よ！ これも違うわ！」

「はーい、正解は〜」

「あ……あぐうううっ❤️ ひうううう〜❤️ んひい  
いいいいいいツツ❤️ お、おチンポがあ……❤️」

「×！ やったね、二つ目もクリアー❤️ 次はどれに



うう~~~~ッ♡

小さく可愛らしい内壁に嬌声を上げる蒼髪ヒロイン。非日常の■女窟穴に勃起ペニスが圧迫されていく。一歩間違えれば性犯罪者になりかねない凶悪なオナホールだ。

唇を嘸んで射精を我慢して、八回目でどうにか答えを言うことができた。

「答えは……ッ……×よ！ このオナホじゃない！」

「はい、正解は〜」

「く……ふううっ♡ シンッ♡ あん、くうううう

〜♡ んっ、んんん〜♡」

「×！ やったね、三つ目もクリアー♡ 今度はどれにする？」

「はあ、はあっ♡ くッ……はあ……つ、次はCよ」

「オッケー♪ C、いつきまーす♡」

Cのオナホールがズリズリと肉竿を飲み込んでいく。内部にはヒダが多くまるでナマコの裏表を逆にしたよ

うだ。

細かい突起愛撫に蕩けた肉竿がさらに怒張する。

ずちゅ♡ ずちゅ♡ ちゅ♡ こりゅ♡ ふに

♡ むにゆる♡

「あ……アン、あぐうううウウウウ~~~~ッ♡

い……イボイボ擦れるうううッッ♡ ふひゅウウ

ウ~~~~♡ お……おああア~~~~ッ♡」

「どこが一番気持ちいいのかな〜？」

「ぜ、ぜんぶ♡ ぜんぶ気持ちいいのおおおおッ♡

んっ……んふ♡ き……亀頭も幹もジョリジョリされ

てえ♡ キンタマが精子作りまくるううウウ~~~~

〜♡」

「例えるならどんな感じ？」

「も……モデル♡ 美人なモデルさんのマンコなの♡

くうう……ひい……ハグウッ♡ やあ……カズノコ天

井のエロマンコお♡ おチンポぜんぶスケベにされる

ううう~~~~ッ♡」



触手チンポに続いてオークに唇を奪われる。さんざん恥辱を味わわされても、唇を奪われるのは特につらい。まるで心が切り刻まれるようだ。

そして、チューリップのような唇を堪能した隻眼オークは次なる辱めを加える。

「ぷ、プハア……へへ、中々よかったぜ。ゴフフフ」  
「この……悪魔っ！ あくうう……ぜ、絶対に許しませんから！」

「そいつは楽しみだ……オイッ、お前らも見てねえで手伝いやがれ！ いつも正義ぶってる天煌聖姫サマを肉便器にしてやるんだろ!？」

リーダーの呼びかけに他のオークが応える。

目の前で痴態を魅せられ続け、誰の肉棒もギンギンになっていた。

「おうっ！ グフフフ！」

「ガルル、やってやろうじゃねえか！」

「ゲへへ、オレのチンポをきれいにしてもらうぜ」

「うっ……臭い……や、やめてください！ そんな汚いもの近づけないでっ！」

様子を見ていたオークたちも輪姦に加わっていく。

ヴァーミリオンに向かつて多数の牡肉竿が突き出された。髪の毛、口、頬、腋、太腿、足裏に押し当て乱暴に自慰をはじめ。むせかえるような牡臭と共にオークペニスが扱かれていく。

不潔な陰茎からは我慢汁だけでなく恥垢もポロポロと出た。汚泥を全身に塗りたくられ紅髪ヒロインは涙をこぼす。

さんざん倒してきたとはいえこの扱いはつらすぎるのだ。

全身にチンポ汁を塗りたいくらいなんぞ、自分が不甲斐なくて情けなくて泣いてしまいたいそうである。

こしゅ♡ ずちゅ♡ ぐちゅちゅ♡ こそすこそす

♡ ぶににゅ♡ じゅりじゅり♡

「はぶっ♡ ぶ、んんむ、ちゅ、ぷはああん

ぶうつ、くふ、ちゆくう♡ んぐううううううッ♡

「どうだオレのチンポは美味いだろおっ!」

「はぐ、むぐううううううっ! お、おいしいわけありません! こんな……く、臭くて苦くて……気持ちが悪いですっ!」

「おいおい、肉便器がなにほざいてんだあ? 正義のヒロインサマは約束も守れないのかよ」

「あうっ、くうう……それは……」

悔しいがこのオークの言う通りである。肉便器になったヴァーミリオンは汚らしい肉棒にも奉仕しなければならぬのだ。

チンポキスしながら桜色の唇を開き、屈辱的な口上を言わされる。

「はう、うう……その、と、とつてもおいしいです♡

ちゆ、くちゆ、チュウウ♡ ン……はあん♡ あ、

あなたのチンポさまでも素敵です♡ あむん……

ちゆぶん♡ ちゆくん♡

「ガハハハハ! そうだ! そうだろうが!」

「は……はい♡ こんなにたくましいチンポには出会ったことがあります♡ べちゆ、むう……んん♡ わたしみたいな負け犬がご奉仕させてもらえてうれいです♡ ちゆ、んん。ちゆるん♡ こくん♡」

「そんなにチンポが好きかよこの変態! 偉そうなこと言っておいて、おしゃぶりに夢中じゃねえか」

「ちゆ♡ はう、んぶう、ふうううううううう♡ ひゃい、変態です♡ ヴァーミリオンはフェラチオ大好きな便器ヒロインです♡ はうむん、くちゆ、ちゆ、ちゆ……ちゆぶん♡ ぷはあ♡ 男性の象徴に媚びることしかできない便器女なんです♡ ん……ちゆぶん♡ べちよ、ちゆっちゆ♡」

肉竿へ積極的舌を這わせ、奉仕の悦びに目覚めていくマゾ聖姫。幹を舐めたかと思うと龟头にむしゃぶりつき、鈴口をちゆうちゆうと吸い上げる

ピンッと傘を張ったカリ首に舌を動かし、溜まった

チンカスをきれいに舐めとつていく。植え付けられたマゾヒズムが覚醒し、男根に染みついた匂いさえも愛おしくなつていく。

淫猥なセリフを口走っていると、本当に自分が肉便器だと思えてくる。わざと大きな音を立てながら肉竿にしやぶりつき、カウパー汁を堪能した。

口腔内を犯されることが心地よくてたまらない。

「ガハハッ、こいつはとんでもねえ淫乱だぜ！ 真面目な顔してチンポしやぶりが好きなんてなあ！」

「はむん、ちゅ、チュチュッ♥ ペロ、ペロリンッ♥  
だつてえ、あんたのチンポがカッコイイのが悪いんです♥ わたしみたいな淫乱マゾがこのチンポ見せられたらあ……♥」

「見せられたらなんだよ？」

「大好きになっちゃいます♥ んぶ、くちゅ、くちゅ、ンン……ちゅくん♥ い、イケメン勃起チンポを目の前にしてナメナメ我慢なんて無理です♥ じゅる、じゅる、べちゅろん♥ 先走りのお汁もチンカスも美味しくてえ……虜になっちゃいます♥」

蜜液をこぼれさせながらデカチンをペろペろする変身ヒロイン。膣内を侵されながら口内奉仕に没頭していく。フタナリペニスもオークのソレと同じように屹立していた。

そして、陶酔した表情で魔悦に溺れていくヴァーミリオンにさらなる恥辱が加えられた。オークの一匹がロング紅髪を手に取り、自らの陰茎に巻き付けたのだ。  
「はぶちゅ、んくううう〜♥ ん!? やつ、そ、それはあ！」

「嫌とは言わねえよなあ？ お前みてえな変態肉便器の髪の毛を使ってやつてるんだぜ？」

「は、はいい♥ 髪コキしてもらつてかまいません♥ んぶ……ちゅうう♥ わたし自慢のロングヘアで楽しんでください♥ ちゅ、ん♥ ふあ……あ、はうぶん♥」

「かまいません？　そこは感謝するところだろうがよお!!」

「あ、ありがとうございます♥　マゾ牝の紅髪でオナニーしていただいで感激ですう♥　いっぱい、いっぱいシコツてくださいね♥　おチンチンに巻き付けてえ♥　むぶ……ちゆくう♥　あんっ♥　はぐううううう……♥　あ……お、おマンコもお……♥　そ、そろそろ限界ですっ♥」

子宮口が緩み魔物の子種を受け入れようとしてしまふ。肉内壁を擦りオークペニスが蠢動し、肉体が小刻みに痙攣しながらオークガズムへ達しようとしていた。隻眼オークは肉勃起をいつそう激しく動かし、最後の責めを加える。

「なんだあ？　もうイキたいのかよ」  
「ふああ……い、イキたいです♥　おマンコを……子宮をノックされてキュンキュンしちゃいます♥　もうオークさまのチンポでメロメロなんですう♥」

「オレたちにやったことを謝罪するならイカせてやってもいいぜ。オラッ、今度はブザマに謝ってみなっ!」

「はいいっ♥　謝罪します♥　誠心誠意謝りますからイカせてください♥　はくうう、ひ、んくうううう♥　ンンン、やあ、きゅふうううん♥　おマンコもチンポもせつないです♥」

命令を全面的に受け入れ淫狼に口を開く。すでに理性は溶解し快楽を求めることしか頭にない。穿たれた腔孔は淫蜜の洪水状態で、フタナリペニスもフル勃起モードだ。

身体中に陰茎を擦りつけられながら魔悦に飲まれていく。

「わ、わたし天煌聖姫ヴァーミリオン……んぶ♥　いえ変態のマゾミリオンは……これまでオークの皆さまにご迷惑をおかけしたことを深く謝罪します♥　ちゅ、ちゅくん♥　はあああ……ん♥　しゅぐ♥　ちゅちゅううう、ん、ゴクン♥」



もヤバいです♥ あんっ♥ あんっ♥ ああん♥

「だよなあ、マゾミリオンは男にヌイてもらうのが好きな変態だもんなあ」

「く、くふうう〜ん♥へ、変態です♥ 変態です

♥ 変態です♥ マゾミリオンはオマンコしながらチ

ンポしごいてもらうド変態です♥ うっ、む、ぐうう

♥ やはあ〜ん♥ お、男の人にチンポ弄つてもら

う淫乱ドマゾです♥

武骨な手のひらコキで理性が崩壊していく。

だって今の自分は肉便器だからいいじゃないか。チンポに奉仕することが使命なのだ。公衆便所のように不特定多数に使用されて本望だ。カウパー汁もチンカ

スも気持ちいい。

しかも大人の男にチンポまで触ってもらえるのだ。うれしいうれしい、もうここに永久就職してもいい

ふたなりの自分に恋人なんてできないのだから。おチンポのついてる女の子を誰が好きになってくれるの

か。そうだ、わたしは肉便器なのだ。

（はあ〜ん♥ も、もうどうでもいいです♥ チンポ汁いっぱいください…フタナリしごいてくださ

い…や、あ、だ…ダメ！ ダメですそんなこと考

えちゃ…で、でもバリアさえあれば妊娠しませんよ

ね…ちよつとくらいなら中出ししてもらっても…

いいですよ♥

快美の濁流に翻弄される。わずかに残った理性までも欲望へ傾きはじめる。もはやヴァーミリオンの脳裏には淫欲しかなかった。

「ゴハハ！ ゴハハハハハ！ いいぞ、イツちまいな！ 変態マゾの天煌聖姫サマよお！ 輪姦されながらイキやがれ！」

「ひゃいひゃい！ もうイキますう♥ わたしイツちゃいます♥ たくさんのチンポに囲まれながらマゾイキ

しますうううううう〜っ♥

オークたちの陰茎が最大限に怒張し、髪の毛、口、頬、







残っていない。

フタナリ調教、残る日数は二十日。  
「ようやく三分の一が終了した。」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】  
隔月発売  
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】  
隔月発売  
1-3-5-7-9-11月

【電子版】  
毎月配信  
着刊日は奇数月  
発売!



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌  
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 3D  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!?  
ジャンルにこだわらない  
ドキドキキララ!

女刑事美優  
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

呪詛喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト  
「ノクターノンノベルズ」  
から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ

異世界 珠姫  
デキる妹  
キララ

ドキドキキララフな  
ハードレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫